

和解の後、私たちにできることはなんだろう

大阪大学院生 屈 帥帥

2009年、日本の市民団体と中国人被害者の長年にわたる共同の取り組みを経て、西松建設と中国人受難者・遺族との間で和解が成立した。翌年、「安野中国人受難之碑」がかつての強制労働の現場である安野発電所の側に建てられた。碑の裏面には中国人受難者・遺族と西松建設の連名で碑文が刻まれ、西松建設の反省の姿勢が読み取れる。

当事者はすでに全員亡くなったが、碑は現在まで15年間そこに堂々と立ち続けている。この碑は広島の人々への中国人強制連行の「記憶の場」（記憶が存在する場所）として中国人受難者を慰めるだけでなく、中国人強制連行の歴史事実を想起させる場として、地元の歴史を学ぶ人やこの歴史を全く知らずに偶然この碑を訪れる人にとっても歴史を学ぶ場になるだろう。原爆による日本人の被害の歴史という定番のほかに、広島にはもう一つ加害の歴史があることを伝えている。

和解後の16年間、中国では受難者と次の世代の間に記憶の継承という課題があったが、歴史を風化させないように努力する継承する会の取り組みがあった。2010年からの西松安野友好基金の和解事業による遺族の訪日活動、2018年の被爆者徐立伝の遺族王小軍らの招請、コロナ禍以降2024年からも遺族を招請して、中国人被害者に関する集会や追悼式などを開催してきた。これらの取り組みはこの歴史を広島の人々に知らせるだけでなく、被害者である中国人の次の世代にこの歴史を改めて想起させ考えさせる効果が大きいと考える。

10月17日から21日まで中国人受難者で被爆者でもある孟昭恩さんの遺族孟憲法さんが継承する会の招きで広島を訪問した。私は通訳として全日程に同行した。孟憲法さんは2011年にも和解事業で来日したので、2回目の広島訪問だったが、前回の記憶はあまり残っていなかった。覚えていたのは記念碑と国立広島原爆死没者追悼平和祈念館（以下、祈念館）の地下の追悼空間の「水」くらいだった。

10月20日、孟さんは再び祈念館を訪れた。案内し

てもらった金子哲夫さんの説明を聞いて、孟さんは新たな記憶を形成したようである。追悼空間への通路に設置された6枚の説明板の中の一つに強い関心をもったのだ。そこには、「国策を誤り」という言葉があった。金子さんは「国策を誤り」という言葉を説明板に入れるために、宮崎安男さんの友人の被爆者が粘り強く交渉した経緯などを詳しく説明した。

翌日、広島県教職員組合を訪問したとき、孟さんは祈念館で見た「国策を誤り」という言葉を何回も繰り返して、その言葉を見て自分は安心したと言った。私も「国策を誤り」という言葉を見て、この言葉は長崎原爆平和資料館の「南京大虐殺」という文字と同じ重さがあると思った。

19日に安野の記念碑前で開催された追悼の集いで、孟さんは事前に準備した原稿を持って挨拶したが、途中で思わず声を詰まらせた。私は、孟さんは原稿を書くときも辛かったのだろうと思った。献花の時には、他の来賓のように始めに参加者に向かってお辞儀をしないで、まず記念碑の方に向かってお辞儀をしてから、記念碑の前で、男として堂々と額ずき、中国式のやり方で父親を追悼した。その後善福寺で行った法要でも、額ずいて追悼した。異国で、孟さんが他人の目を気にせず自国のやり方で追悼する様子を見て、私は感動した。孟さんは、父親は礼儀正しい人だったと話したが、孟さんも同じように情けがある人だと思った。遺族は必ずしも父親や祖父の苦難をはっきり覚えているわけではない。歴史が少しずつ風化していくのはおかしくないが、私たちにできることはなんだろう。

孟さんは親を追悼する気持ちがどれほど強いのかということを見せしてくれた。そこに家族の歴史を継承する決意を見ることができるだろう。歴史が風化していくと言うが、それは記憶の場がないからではなく、記憶の場で交流する人々が少なくなったためではないか。今後、私たちは記憶の場をどう活用していくかを考えるべきではないだろうか。